



22122037



JAPANESE A2 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Thursday 10 May 2012 (morning)

Jeudi 10 mai 2012 (matin)

Jueves 10 de mayo de 2012 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.
- The maximum mark for this examination paper is *[30 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A, soit la section B. Écrivez un commentaire comparatif.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[30 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[30 puntos]*.

問題Aか問題Bのどちらかを選び、答えなさい。

問題A

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。

テキスト1

東京都心の旧屋敷町に住んでいる。古い大きな屋敷、江戸時代からという床屋、魚屋、八百屋さんの店が、次々に高層マンションに変わってゆく。

私の住むマンションの玄関から通りに入る路地の途中に、小さいが古く格調のある家がある。砂を塗りつけた土塀が、乾き切ってはげかけ、染みがこびりついて立っている。

- 5 ところが何日か雨が降り続けると、土塀の地面に近い部分にうっすらと苔が生え広がる。上のほうの黄土色にぎらついた部分、中ほどの暗褐色に染みの浮き出した部分、そして雨にぬれてしっとり光る苔の鮮やかな緑の部分----そんな色調と感触の変化と取り合わせが、精妙な非具象画の絵のように美しい。

また夜、通りに出ると、街灯の蛍光に照らされた街路樹の葉並みが、息を飲むようにきれいだ。

- 10 昼間は薄汚れ苦しげにあえいでいるような街路樹が、人工の光の中では見違えるような生气と輝きを帯びて静まり返って見える。この世のものならぬオブジェのように。

私はこれまでの生活のほとんどを都市で過ごしてきた。そして都市が好きだ。戦後慌ただしく建てられた形だけの無神経なビルや、色彩感覚など全くない看板の列はおぞましいが、この数年来の新しい高層建築の工夫を凝らされたデザインや材質は眺めるだけで快い。高架高速道路が商店の並ぶ通りの頭上を走っているのは重苦しいが、場所によっては二重三重に交錯するカーブの曲線がダイナミックな感動を与える。

- 15 自然という言葉から、もはや私は山河田園だけを思う浮かべることはできない。自然に実感するのは、すでに鉄とコンクリートとビニールとガラスと蛍光灯を、深く組み込んでしまった世界である。

- 20 生き物が嫌いというわけではない。息子が小さかったころ、水族館や昆虫館によく行った。息子が少し大きくなってからはグアム島の珊瑚礁内でシュノーケルをつけて並んで泳ぎながら、熱帯魚の群れをのぞく。南海の壮大な夕焼け。日本の海岸で好きなもの。砂丘の風紋。

星、風、砂、さまざまな生き物、そしてさまざまな人工物----どれも主役でも背景でもなく、等しく並び絡み合って、刻々に変容し、壊れては生まれ、そして一瞬静まり返る色とにおいと音と感触と陰影と気配の不思議な総体。それが私にとっての自然だ。

- 25

日野啓三『都市という新しい自然』1988年

日野啓三（1929～2002年）小説家。

テキスト2

人間と自然のかかわりって何なのだろうと考える時、十代のころ抱いた不思議な感覚を今でも思い出す。それは現在の僕のもの感じ方、考え方のベースにどこかでかかわっているような気がしてならない。

5 あのこと、北海道の自然に憧^{あこが}れていた。アラスカどころではなく、当時の僕にとって北海道さえ遠い世界だった。北海道に関するさまざまな本を読みあさっていた。

いつしかあることが気にかかり始めた。それはヒグマのことだった。自分が生きている同じ国で、ヒグマが同時に生きていることが不思議でならなかった。もう少し詳しく言うと、例えば満員電車で揺られながら学校に向かう途中、東京の雑踏を歩いている時、ふとそのことが頭に浮かんでくるのである。今、この瞬間、ヒグマが原野を歩いているのかと……。

10 よく考えれば、あたりまえの話である。北海道にはまだたくさんの自然が残っているのだから。だが、その時はそんなふうには思えなかった。自然とは、世界とはおもしろいものだった。それを今言葉にすると、すべてのものに平等に同じ時間が流れている不思議さだったのだろう。

15 数年前、同じようなことを言った友人がいた。東京で忙しい編集者生活を送る彼女は、なんとか仕事のやりくりをしてアラスカの僕の旅に参加することになった。それは南東アラスカの海でクジラを追う旅だった。わずか一週間の休暇であったが、幸運にも彼女はクジラと出会うことができた。ある日の夕暮れ、ボートの近くに現れた一頭の巨大なザトウクジラの行動が突然空中に舞い上がったのだった。クジラの行動が何を意味するのかはわからないが、それは言葉^{言葉}を失う、圧倒的な一瞬だった。

20 その時、彼女はこう言った。「仕事は忙しかったけれど、本当にアラスカに来てよかった。なぜかって？東京で忙しい日々を送っているその時、アラスカの海でクジラが飛び上がっているかもしれない。そのことを知れただけでよかったんだ。」

25 僕には彼女の気持ちが痛いほどよくわかった。日々の暮らしに追われている時、もう一つの別の時間が流れている。それを悠久の自然と言ってもよいだろう。そのことを知ることができたなら、いや想像でも心の片隅に意識することができたなら、それは生きてゆくうえで一つの力になるような気がするのだ。

星野道夫『長い旅の途上』1999年

星野道夫（1952～1996年）写真家。

問題B

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。

テキスト3

電話のすぐあとで手紙が着いた
あなたは電話ではふざけていて
手紙では生真面目だった
〈サバンナに棲む鹿だったらよかったのに〉

5 唐突に手紙はそう結ばれていた

あくる日の金曜日（気温三十一度C）
地下街の噴水のそばでぼくらは会った
あなたは白いハンドバックをくるくる廻し
ぼくはチャップリンの真似をし

10 それからふたりでピザを食べた

鹿のことは何ひとつ話さなかった
手紙でしか言えないことがある

そして口をつぐむしかない問いかけも
もし生きつづけようと思ったら

15 星々と靴ずれのまじりあうこの世で

谷川俊太郎『手紙』1984年

谷川俊太郎（1931年～）詩人。

チャップリン・・・・（1889～1977年）コメディアン、俳優、映画監督。弱者や貧者の立場から、資本主義社会における不満を表す放浪者のキャラクターで有名。

テキスト4

直貴が兄と会ったのは、事件からちょうど十日目のことだった。警察から連絡があったのだ。剛志が弟に会いたいといっているらしい。直貴は、逮捕された兄と会えるとは思っていなかった。ので、ずいぶんと驚いた。(中略)

5 四十過ぎと思われる五分刈りの刑事が、直貴に椅子を勧めた。彼はそこに腰掛け、俯いたままの兄を見つめた。兄はまだ動かなかった。

「おい、どうした」刑事がいった。「せっかく弟さんが来てくれたんじゃないか」

それでも剛志は黙っていた。声を発するきっかけを失っているように見えた。

「兄貴」直貴が呼びかけた。

10 剛志の体がぴくりと動いた。呼びかけに、というより、聞き慣れた声を聞いて条件反射的に身体が反応したようだった。彼はわずかに顔を上げ、弟に目を向けた。だが、目が合うと、また視線を床に落とした。

「直貴・・・」剛志の声はかすれていた。そのまま続けた。「すまん」

15 絶望感が改めて直貴の胸に迫ってきた。何もかもが悪夢ではなく現実なのだと再認識させられた。この十日間、必死で現実を受け止めようと努力してきたつもりだったが、やはり心のどこかで「何かの間違い」を期待していたのだ。だが、直貴の中で、ほぼ壊れかけていた積み木の最後の一つが、ころりと音を立てて落ちた。

「なんでだよ」直貴は声を絞り出した。「なんでこんなこと・・・」

剛志は答えなかった。机に置いた左手が小刻みに震えていた。その爪は真っ黒だった。

「なんでだと弟さんが訊いているぞ」刑事が剛志にいった。低い声だった。

20 剛志は吐息を一つつき、自分の顔をこすった。一度きつく瞼を閉じ、その後再び大きく息を吐いた。

「どうかしてた。俺、どうかしてたよ」それだけというのが精一杯のように彼はがっくりと首を折った。その肩が揺れていた。呻き声が漏れている。その足下にぼたぼたと涙が落ちた。

25 直貴には兄に問い質したいことが山のようにあった。責めたくもあった。だが何ひとつ言葉が出てこなかった。そばにいただけで、兄の後悔や悲しみがテレパシーを受けるように伝わってくるからだった。

直貴が取調室を出ていかねばならない時刻になった。彼は兄にかけるべき言葉を探した。自分にしかいえない言葉があるはずだと思った。

「兄貴」ドアの前に立ってから彼はいった。「身体に気をつけろよな」

30 剛志が顔を上げた。はっとしたように目を見開いていた。仕切りのない空間であえるのはこれが最後だと気づいた顔だった。(中略)

剛志から手紙が届いたのは、直貴がそんなふう日々を送っている時だった。卒業式を二日後に控えていた。拘置所から手紙が届くことは予想していなかった。ので、彼は少し驚いた。

東野圭吾『手紙』2003年

東野圭吾 (1958年～) 小説家。